

国際社会で発信する能力の育成(4)

—効果的な教材開発を目指して—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

山田 忠弘・秋元 佐恵・多尾奈央子
高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子

国際社会で発信する能力の育成(4)

—効果的な教材開発を目指して—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

山田 忠弘・秋元 佐恵・多尾奈央子
高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子

要約

2007年度からの研究テーマ「国際社会で発信する能力の育成」における4年目の取り組みの概要を振り返る。本校でも海外生徒との交流の場が広がっており、生徒たちは自身の英語コミュニケーション能力を試される機会が多くなってきた。どのように生徒たちの意識を高め「発信力」の育成に努めているかを、各学年における取り組みを中心に報告する。

キーワード：発信、基礎期、実践期、発展期、教材

1 はじめに

本校英語科は中高6ヵ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6年間を基礎期[中1・中2]・実践期[中3・高1]・発展期[高2・高3]という3つの段階に分けて位置づけ指導にあっている。

また、2010年度における本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」となっている。このことと関連して、昨年度・今年度と継続して、校内国際交流プロジェクト委員会では「トップリーダー形成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」という目標を掲げており、英語科としてもそういった学校目標に積極的にかかわるべき立場にある。

プロジェクト研究「国際社会で発信する能力の育成」の4年目を終えたところで、この1年間の取り組みを振り返る。

2 本校生徒が国際社会に触れる機会

2.1 はじめに

本校は平成14年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定され研究活動を行っている。また今年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的

教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、その影響もあってこの数年で、本校生徒が学校教育活動とかがかわって国際社会を実感する機会が確実に増えてきた。

昨年度・今年度の国際交流関係の活動事例を以下にあげる。

2.2 2009年度

- a. 海外修学旅行生徒の受け入れ
2009年11月18日 Anglo-Chinese Junior College (シンガポール) 生徒30名来校
本校授業<数学・化学・生物・情報>に参加
- b. 在日外交官日本語ブラッシュアップ研修への協力ならびに『ニッポン発見塾』参加の諸外国若者との交流会開催
- c. 各種国際オリンピックへの参加<数学・物理・化学・生物・情報・地理>
- d. 台湾国立台中第一高級中学校との生徒研究交流 [SSH事業の一環として]
2009年12月14日～19日に相手校を訪問して物理・化学・生物・言語学分野での研究発表交流会を開催(参加生徒高1・高2生10名)

2.3 2010年度

- a. 海外修学旅行生徒の受け入れ
2010年5月10日 Amity International School (インド) 生徒10名来校
本校授業<数学>に参加
- b. 海外短期留学生の受け入れ

- c. 在日外交官日本語ブラッシュアップ研修への協力
- d. マイクロソフト Imagine Cup 2010 (ポーランド) へ日本代表として参加
 その他各種国際オリンピックへの参加<数学・物理・化学・生物・情報・地理>
- e. RITS スーパーサイエンスフェア2010 (19 カ国参加) への参加・口頭発表[SSH 事業の一環として]
- f. 台湾国立台中第一高級中学校との生徒研究交流 [SSH 事業の一環として]
 2010 年 12 月 14 日～19 日 (参加生徒高 1・高 2 生 14 名)
- g. 生徒自治会役員会による英語版学校紹介冊子の作成
- h. 総合学習『中学 3 年生テーマ学習』への「サイエンス・ダイアログ」(日本学術振興会による在日外国人研究員の無料レクチャー派遣事業)の導入
 このような多彩な機会を通じて、生徒は自分がいかに英語でのコミュニケーションができないかに気づかされる。教員はこういった彼らの気づきを大切にし、また、生徒が「この授業をきちんと受ければ力がつく」と実感し食いついてくるようなものを工夫していかなくてはならないであろう。
 こういった意識を持ちながら今年度の各学年ではどのような指導を行ったかについて以下に報告する。

3 各学年における取り組み

3.1 中学 1 年生 (64 期) 担当: 平原麻子

3.1.1 はじめに (基礎期のスタート)

昨今、小学校での英語活動を経験して入学してきた生徒がほとんどとはいえ、本格的な英語の「授業」は彼らにとって初めての経験である。本校ではすべての学年で毎学期ごとに実技テストを行い口頭発表能力の養成を図っているが、中学 1 年生ではその基礎作りを行う。

今年度、生徒に示した目標は以下の通りである。

- ① 英語らしい音声を身につける。
- ② 積極的にコミュニケーションを図る態度を身につける。
- ③ 英語の論理に慣れる。

以上の目標を達成するためには特に音声面で週 4 時間の英語の授業 (= 総計 200 分) だけでは足りないのは明らかであり、生徒には NHK ラジオの『基礎英語 1』をはじめとする語学番組の定期的聴取を奨めている。また、夏季・冬季などの長期休暇には CD 付きの

まとまった読み物を読ませ、内容確認のみならず音読やディクテーションにも取り組ませる工夫をしている。

その他、上記③の目標は、「因果関係をはっきりさせる言語」という英語の発想に慣れ、国際的なコミュニケーションの場で違和感なく意思疎通が行えるようになるための布石であり、作文やスピーチ指導の場などで意識的に取り組んでいる。

3.1.2 授業での取り組み

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成される。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」 2 時間、「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」 1 時間、「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」 1 時間という組み立てである。

以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業 (週 2 時間)

New Crown English Series (三省堂) を使用し、音読を大切に授業を行っている。音声面強化のため、チャンツや早口言葉なども適宜使用している。夏季休業中の課題として *"Let's Go to the Rainforest* (Oxford 大学出版) を CD 付きで配布し、読解だけではなくリスニングや音読にも取り組ませた。引き続き冬季休業中も CD 付きの *Penguin Active Reading* シリーズより *The Long Road* を利用した。

(2)LL 教室での授業 (週 1 時間)

LL 用コースブック *Tactics for Listening* (Oxford 大学出版) を使用し、リスニング力向上を図っている。

(3)ティームティーチングの授業 (週 1 時間)

アメリカ人 ALT と共に行う授業で、教科書ではカバーできない日常的な単語を多く取り上げて語彙力増強を図りつつ、既習の文法事項を定着させるために意味のある言語活動を行い、実際に使える英語力の育成を目指している。その他、英語のリズムに慣れるために毎月「今月の歌」として英語の歌をひとつずつ取り上げ、授業の始めに歌っている。今までに取り上げた歌は、“Old McDonald Had a Farm”、“Bear Went Over the Mountain”、“The Farmer in the Dell”、“Yankee Doodle”などである。

次に授業の指導過程として 1 例をあげる。

1) 英語の歌 “Jingle Bells”

2) 助動詞 can の定着練習

- a. What ~ can you . . . ? の基本パターンを口頭練習

Ex.) What food can you cook?

I can cook *tempura*.

- b. 上記パターンを使った ALT の質問に答える

3) Interview & Reporting

- a. 各自 2) のパターンで自分のオリジナルな質問を作り、10 分間でなるべく多くの生徒に聞いて回る
- b. 得られた回答を人数の多い順にまとめてランキングを作成し、指定された形で summary を書く
- c. 各自の結果を口頭発表する

生徒の発表例: My question is "What song can you sing?". No.1 is "Jingle Bells". No.2 is "Doraemon's Song". No.3 is our School Song.

その他、学期ごとのパフォーマンステストとして、スピーチを行っている。1 学期のテーマは「自己紹介」、2 学期は「僕の好きな人物紹介」であった。スピーチをさせる時の評価のポイントとして①Speak clearly. ②Eye contact ③Speak logically. の 3 点を重点的に指導している。また、各自のスピーチのあとには必ず ALT との一問一答の時間を設けている。

以下にスピーチの 1 例をあげる。

Hello, everyone. My favorite person is astronaut Soichi Noguchi, because he studies about space very hard. And he is very funny. For example, he did arm wrestling and jump rope in the space. He can speak English very well, too.

He gave us dream. He is a great astronaut. I want to become like him.

Thank you. (57 語)

3.2 中学 2 年生 (63 期) 担当: 多尾奈央子

3.2.1 はじめに (基礎期から実践期へ向けて)

昨年度に引き続き、筆者が JTE 単独の授業 (2 単位) + TT 授業 (1 単位) を担当し、LL 授業 (1 単位) を別の教員が担当している。教材は、通常授業では三省堂の New Crown English Series 2 を、TT では Let's Go (Oxford University Press) や Side by Side (Pearson Education) を基本とし、数種の ELT 教材から作成した教材を使用している。

不定詞・比較級・受動態等、中学 2 年生で扱う大きな文法を種々の演習問題が解けるまでの単なる知識として終わらせず、「知っていることを必要な時と場合に運用することができる」力をつけるための学習を授業内外で行うことがいかに大切かを理解させ、それを実践することを指導の最重要目標とした。具体的な内容

は以下に述べる。

3.2.2 具体的な取り組み

3.2.2.1 JTE による単独授業

以下が上述の目標到達のために日々の授業で行ったこと、留意した点である。

① Tongue Twisters

昨年度に引き続き、授業の warm up としての位置付けだけでなく、英語を学習するときはその文字と併せて音声も学習すること、反復練習で内在化を促すこと、日頃しないような発音や口の動きに慣れることを図った。早く上手に言えないおもしろおかしさで終わらぬように毎回紹介前にポイントとなる音声 (発音記号) を示し、文の意味よりもその音声に意識を集中させ練習した。昨年度との違いは、授業で扱う文法事項を含んだものを選出したことである。以下に一部例を示す。

・ When we were walking, we were watching window washers.

・ The thirty-three thieves thought that they thrilled the throne throughout Thursday.

・ Mr. Tongue Twister tried to train his tongue to twist and turn, and to learn the letter "T".

・ When you write copy, you have the right to copyright the copy you write... .

② 前時の TT 授業の復習・発展

「聞く・話す」主体の TT 授業で導入した新文法事項 (表現のみ) を含む内容を、「読む・書く」主体で復習した。このときに文法規則等を説明し、知識として理解させた。穴埋めや書き換えなどの演習問題はできるだけ避け、動詞だけを与えて自由に英文を作り発表させた。周囲の興味を引きたい気持ちがとても強いようで、この部分は生徒も楽しみにしている時間となっている。

③ 教科書本文

教科書で扱われている題材を発展させ、より自分たち自身の日常と関連を持たせた教材を作ることを留意した。触れた英文が他人事ではなく、自身に何か接点があることで持つ印象は大いに違う。「読み」においては、音声面での反復練習を徹底し、発音やアクセントについてはうるさく指導した。(repeating, chorus reading, read and look up, gapped read-and-lookup)。

3.2.2.2 ALT とのチームティーチング授業

単独授業での練習と同様に、新たな文法事項の導入

において自分たちで自由な状況を設定してペアで発話練習した内容を発表することを楽しみにしている。まずは当該言語材料がこういった場面で発話する必要があるかを考えさせ、具体的な英語での表現を紹介し、パターン練習をし、その後自由に skit 等を作って発表させた。各学期末には学習した言語材料を使用したスピーチを行っているが、ただ作成したスピーチを発するだけでなく、演技も加わり、より聴衆を意識した時間となるように生徒は努めている。1年次のスピーチと比較すると知っている文法事項が何かを表現するには事足りる程度となっているために、内容以外で大事なポイントである「大きな声で、聞いている人の目を見て、はっきりと話す」、さらには聴衆の興味関心を引き印象に残るスピーチとするための工夫に意識を向けることができたようである。

3.2.3 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、中学2年次で扱う単元・言語材料と生徒たちの日常に自然な接点を見出し、発信能力の基礎力を固めることに集中したが、3学期は更に SSH として科学的内容を間接的・直接的に使用して、「科学」を考えるきっかけとなるものを学習材料として扱うことを考えている。

3.3 中学3年生(62期) 担当: 山田忠弘

3.3.1 教科書を使用した授業(週2時間)

教科書は三省堂 *New Crown English Series 3* を使用し、1ページ毎に chorus reading → 本文説明 → 自作プリントによる文法演習というオーソドックスな流れで進めている。毎週初めに小テストを行い、単語と基本本文の定着を図っている。

教科書のストーリーに関連する補助教材があれば、教科書の進度を止めてそれらを扱うこともある。1学期は教科書 Lesson 4 の佐々木禎子に関連して、英語の絵本 *Sadako* (Eleanor Coerr / Ed Young) を読んだ。

2学期で教科書及びその文法事項は終了させ、3学期は先取りはせずに別の読み物を扱う。今2学期は少し早めに読み物に入り、現在 William Shakespeare の *The Merchant of Venice* (Macmillan Readers / retold 版) を読んでいる。

3.3.2 ティームティーチング授業(週1時間)

昨年に引き続き、TTの授業では全員がクラスの前で英語を話す機会を出来るだけ与えている。会話練習(pair work)では、教科書で扱う文法事項を先取りする

こともある。下の例では生徒が空所に好きな語句を入れる。題材は Longman の *Side by Side* を適宜抜粋して使用することが多い。

A : ① _____ look(s) ② _____.

B : [He / She / They] must have ③ _____, but that doesn't make [him / her / them] so _____ ②.

A : I'm a little concerned. Maybe we should _____ ④ _____.

B : That's a good idea.

正確な発音や文法より、大きな声とわかりやすいスピードでクラス全体に伝わっているかどうかを重視して指導している。難しい語や文法・語法の誤りについては、クラス全体と共有できるように各発表後に板書やALTの説明を加える場合もある。

また、今年度2学期からの試みとして、簡単なdebateを行っている。affirmative team(4名)がresolutionを1つ提示し、それぞれ supporting opinion を述べていく。negative team はそれに対して素早く refuting opinion で返していく。supporting opinion を述べた生徒がそれに対してさらに何か返答できればOKとする。resolution はこちらで選択肢を与えるが、彼らの学校生活に基づくような平易なものを多くしている。

- Foreign vacations are better than domestic vacations.

- We should(not) give away 'Senkaku Islands' to China.

- We (don't) have to clean our classroom everyday.

- We can(not) live a happy life without girlfriends.

- English classes should (not) start in elementary school.

debate のスタイルや表現などはテキスト *DISCOVER DEBATE* を適宜抜粋して利用している。

昨年同様、学期末にテーマを決めて原稿を書かせた上で、スピーチを行っている。聞く側の生徒には簡単な評価表に記入させ、聞き取りやすさ、内容の分かりやすさについても評価ポイントとしている。学年が上がるにつれて複雑な文章が書けるようになってはいるが、なるべく平易な文章で聞き手に配慮すべきであるということも指導している。

3.3.3 テーマ研究(年6回・土曜日)

今年度の中3テーマ研究は、日本学術振興会のサイエンス・ダイアログというプログラムに参加している。

これは、日本の大学で最先端の科学を研究している外国人研究者（1回に1人ずつ、年間で5人）が来校し、英語で講義をしてもらおうというものである。

毎回それぞれ講師の専門分野や国籍が異なるため、専門的で難しい科学の話だけでなく、自分の出身国や文化、自分の研究に使う基礎的な科学、そして、現在の自分の研究についてなどを、英語（ただし英語が母国語ではない場合が多い）で、必要に応じてパワーポイントなどの資料には日本語も用いて、話をしてもらい、その後、英語での質疑応答を行っている。

また、時間に余裕がある日は、講義内容や必要な語彙などについて先に資料を頂いておき、前半の時間で事前学習をすることもある。

また講師によっては、自分が研究に使っている実物（サンゴ、炭素結晶など）を持参し、生徒の興味を引く展示や実験をしてくれる場合もある。

2学期までのテーマと講師は以下の通りである。

- 第1回 Coral Reefs (Dr. Marc Humblet)
- 第2回 Pollution & Strategy (Dr. Yiping Zhao)
- 第3回 Physics & Graphene (Dr. Michael Marz)
- 第4回 Biological Clock (Dr. Jean-Michel Fustin)
- 第5回 Civil Engineering & Structural Dynamics (Dr. Giorgio Barone)

実際に行われている最先端の科学研究を知ることが出来るだけでなく、世界の様々な国の文化や様々な種類の英語に触れる非常に良い機会となっている。また、日本に興味がある若手の研究者たちは生徒に対してフレンドリーに接してくれており、将来の科学への興味、英語を学ぶ必要性などを普段とは違った角度から感じることが出来る活動であると言える。

3.4 高校1年生(61期) 担当：秋元佐恵

3.4.1 はじめに(実践期から発展期に向けて)

国際社会で発信する英語力を育成するために、高校1年の段階で求められることは何か。学年が始まる際に自分なりに得た解答は以下の3つである。

- ① 発表能力の基盤となる言語構造(文法・語彙)を、なるべく自然な形で身につけさせる。
- ② 世界に目を向けた題材に数多く接することで問題意識をもたせる。
- ③ 以上2つをもとに、英語で自分の考えを述べる訓練をする。

6年間のシラバスの中で「実践期」2年目にあたる高校1年では、続く「発展期」でより高度な内容を伝えられるよう、高校英語の基礎体力を十分につけるこ

とを目標としたい。そのためにはまず、アウトプットの前提となる「質の良いインプット」が重要だ。この場合の「質の良い」とは、authentic と言い換えてもよい。EFL環境での学習者にとって、授業時間内のインプットは大きな意味をもつと思われる。実際に広く用いられていて、かつ、学習者にとって使い勝手のよいもの。単語、コロケーション、文、題材、とそれぞれのレベルで authentic なものを、身につけやすい形式で提示してゆくことが、授業者の役割であると思う。生徒たちはそれを intake に転換するまで訓練して身につけ、自分なりの英語で output へとつなげてほしい。

以下、①と③の目標に特化した取り組みを紹介する。

3.4.2 授業での取り組み

3.4.2.1 テキスト暗誦シート(目標①)

授業では教科書や英字新聞、ラジオのニュース、インタビュー、小説などを適宜扱っている。その際行っているのが、「テキスト暗誦シート」を用いたタスクである。これは、前回読んだテキストの中から、身につけてほしい文を10~15個ピックアップして、B5用紙に日英対照を載せたものである。ただし作る際に少々加工する。たとえば、ターゲット文法を用いて書き換える、単語を類義語に変える、より言い易いリズムにする、などである。チャンクの切れ目も見やすいように視覚的な工夫をする。なお語彙に関しては、active vocabulary と passive vocabulary をかなり明確に意識して作っている。ここに出す単語は、active なものとして、自分で使えるようになってほしい。

生徒はこれを個人やペアでゲーム感覚で覚えていく。さらに覚えた後、英文を別の英語で言い換えるパラフレーズ練習や、全体を要約する訓練なども加える。よってこのシートは、前回の内容の復習というよりは、アウトプットへの橋渡し(Intake)としての位置づけである。

3.4.2.2 要約(目標③)

科学的な論文を読ませたときには、100語~150語程度で要約させる。また、授業や課題で読ませたエッセイについての感想や、学校行事の所感など100語程度で書かせている。いずれの場合も、仲間の満点解答例を提示すると、次回以降の刺激となるようだ。

3.5 高校1年生オーラルコミュニケーションI(61期) 担当：平原麻子

3.5.1 はじめに

本校は「オーラルコミュニケーションⅠ」2単位時間を高校1年生の必修科目として履修させている。週2時間のうち、1時間はLL教室を使って主にリスニング力とスピーキングの基礎力養成を目指し、1時間はネイティブ教員とのティームティーチング(TT)にあてて口頭発表能力の育成を図っている。

3.5.2 LL 授業での取り組み

今年度は非常勤講師にLL担当をまかせているため、LL授業の詳細については平原他(2010)を参照していただきたい。

総合的なプレゼンテーション能力を伸ばさせるために、LL授業において意識的に鍛えているスキルは以下のようなものである。

- ① 概要をとらえるトップダウンのリスニング
- ② ひとつひとつの音の変化に対する気づき
- ③ 正確なディクテーション

これは②と深く関連するスキルだが、文法力を鍛える上でも役立つ。例えば I'd や It'll といった、慣れないうちは聴こえない音も文法知識があれば補って聴くことができるようになる。

- ④意味を伝えられる音読
- ⑤シャドウイング

シャドウイングを取り入れた授業は最近の流行ではあるが、リスニングのみならずスピーキング能力をつけるためにも役立つと言われている。

3.5.3 ティームティーチング授業での取り組み

3.5.3.1 教材

採択教科書『Interact Oral Communication Ⅰ』(桐原書店)を適宜利用している。その他、担当ALT自らが書いた文章や英字新聞(週刊STなど)、インターネット上のニュース記事等を利用。できるだけ時事的な英語に触れて語彙を強化したうえ、その内容について自分の感想や意見が言えるようになることを意識した指導を行っている。今年度は「裁判員制度」「尖閣諸島ビデオ流出」「チリの炭鉱労働者救出」などの話題を取り扱った。

3.5.3.2 TTで鍛えるスキル

以下が高校1年時での獲得を目標としているスキルである。

- ①日常的な場面において自分の気持ちや考えを英語で適切に伝える

- ②人の話を聞きながら的確にノートを取り、その内容を自分の英語でまとめ、発表する。また聞いた内容に関して積極的に質問をする

- ③ 論理的な話し方を身につける

3.5.3.3 授業でのタスク

上記のスキル獲得を目指して毎時間、様々なタスクを行っている。また、各学期末には個人やグループで取り組む実技テストを設定している。

上記①から③の各スキルに対応した授業内容とタスクを以下に紹介する。

- ①毎時間日常的な場面を設定し(例:医者にかかる、デートの約束をする等)、まず短い基本の会話パターンを練習したあと内容をふくらませていき、ペアでのオリジナルな会話に発展させる。

この取り組みの延長線上として、3学期末にはペアごとに有名人になりきって会話をする、というパフォーマンステストを予定している。

- ②ALTによるまとまった話(ALT本人が体験した身近な話題)やその時々ニュースを聞きながらメモを取り、質問に答えたりサマリーを作ったりする。また話の内容について積極的に質問をしたり、感想や意見を言う。

- ③1学期末は“If I Were an Entrepreneur”というスピーチを各自2分程度で行った。盛り込む内容としては、その事業を志す理由、成功に導くためのプロセス、全体的なメリット・デメリットなどを論理的に分析し、因果関係をはっきりさせた具体的なスピーチを心がけるよう指導した。どのような分野であれ、こういった意識を持つことが効果的なプレゼンテーションを行う上での基礎力となるからである。

また2学期は毎回の授業で6名ずつ、「自分が人にすすめたい物・事」をテーマに約3分のスピーチを行い、その後2分程度、聴衆とALTからの質疑応答を行った。話し手の訓練に加え聞き手の側にも、人の話を聞いて積極的に質問する、という態度を育成したいからである。

以下にスピーチの例を示す。

Hello. Do you know this drink? (写真を見せる)
Today what I want to recommend is 'green tea.' I like it so much that I drink it every morning. And my family like it very much too. There are three tea-pots in my house. Why do I like green tea so much? I have four reasons for it.

First, green tea is bitter, and matches with sweets; for example, *daifuku*, *yokan*, *rakugan* and so on. The smell of green tea is nice and

comfortable. In fact, it is often used in aromatherapy and have become popular among many people. The taste of it is fresh, and not heavy. So whether young or old, most people don't dislike this drink, I guess.

Second, it makes me refresh myself when I am tired. In fact, it has caffeine, so when I am sleepy, it deprives me of sleep. It is very useful.

Third, as you know, green tea has great advantage for our health. According to Wikipedia, it has catechin, and reduces our cholesterol in blood, and prevent cancer. Some experts say that green tea is 'the future healthy drink.' I think green tea is the key to long life of Japanese; in other words, the wisdom of ancestors.

Finally, green tea is traditional drink, that is, traditional culture of Japan. To my surprise, Japanese have drunk it since 1,200 years ago, in *Heian* period. However, these days, young people have not drunk it increasingly. I think this means the loss of the Japanese culture. So I want to drink more green tea.

For these reasons, I recommend green tea to you. Green tea has long history, and have played an important part in Japanese life. Why don't you drink it?

Thank you. (296 語)

3.6 高校2年生(60期) 担当:高橋深美

3.6.1 はじめに

高校2年生の英語科目は英語Ⅱ(4単位)のみである。普通科としては最も少ない部類であろう。この4単位について、1単位分を鈴木(非常勤講師)がTTで担当し、3単位分を高橋が担当している。

3.6.2 ティーム・ティーチング(1単位分)

2学年では、学年を通し、主としてディベート活動を行っている。

1学期はディベートの骨格となる *constructive speech* を主に行った。学期の前半ではその資料や参考となる事柄について、ハンドアウトを使用し、後半では生徒が各自スピーチを行った。生徒がスピーチを行う際、他の生徒は *summary* を口頭で伝えたり、*constructive speech* を行う活動を取り入れた。スピーチのテーマは *Missile defense should be banned.*

/ Tsukukoma should become a co-education school.

/ Should we promote globalization? などであった。

ネイティブ・スピーカーはハンドアウトの模範朗読、情報提供をした他、生徒の活動に加わって生徒の発話活動を促した。

また、ディベートの活動以外に、5月に修学旅行が行われた後、その感想を俳句(日本語)で表現し、それを英訳して発表し合う機会を設けた。

2学期はディベートに向けての種々の活動、および実際のディベートを行った。学期の前半ではディベートのテーマを絞る際に参考となる資料を配布するとともに、実際に *pro* と *con* に分かれて練習を行い、ルールや進行の仕方について学習した。

後半では実際に5~6人を一チームとして、意見を戦わせるディベートを行った。生徒が選んだディベートのテーマとしては、*Tax on cigarettes should be increased. / We should lower the age of majority to 18. / Prescription (時効) should be abolished.* 等がある。*audience* には *audience sheet* を配布し、論戦が終わった後に、全員が *pro* か *con* かの意見を表明する場を設けた。

ネイティブ・スピーカーは、準備段階では適宜生徒の発話活動を促す役割につき、実際のディベートの際にはディベート終了後にそれぞれのチームの展開について *summary* やコメントを話したり、*audience* の意見表明の際に司会をしながら、その意見を聞く役に就いた。

3学期は *skit* を作成し、演じる活動を予定している。

3.6.3 教科書・発展教材を使用した授業(3単位分)

3.6.3.1 概要

TTの方ではスピーチやディベートなどのオーラルコミュニケーションを主体に授業を展開しているのも、こちらでは教科書を一つのガイドとして用い、コミュニケーションを念頭に置きつつも、必ずしもオーラルコミュニケーションには限定しない授業を行っている。

筆者はこの授業を、世界で起こった、あるいは起こっているさまざまなアスペクトに、英語を通して接触し、各自の見解を持つ場と設定している。教科書は *Unicorn English II* を使用しており、これは多様な教材が載っているので、話題の軸を取るにはよい。しかし、教科書の本文は訳文付きで簡単にインターネット上にも見つけることができるので、もはや教科書だけでは授業にはならない。よって、教科書の本文読解は行うが、そのレッスンに関連したトピックを取り上

げ、少し背伸びをするようなレベルの読解教材を用意したり、適宜パラグラフ整序、文挿入、英訳などの問題をとり混ぜた教材を発展教材として使用している。

3.6.3.2 授業において使用した教材例

以下に本年度2学期までに扱った教科書のレッスン、発展教材について、若干のコメントを添えて述べることにする。

1学期

第1課 10代で聴力を失ったが、その後打楽器奏者として活躍するまでになった女性の話

発展：サバン症候群をもつピアニストの話

サバン症候群の説明には精神医学の語彙が含まれているが、おおむね生徒が理解可能なものであった。

第2課 動物保護のためにカラハリに滞在していた青年たちが、自分たちに馴れたライオンが撃たれたという知らせを聞く

発展：南アフリカの国立公園が直面している、象の保護と駆除のジレンマについて

第4課 ファッションが時代とともにかわること

男子校の生徒がどれほど関心を持つかと思っていたが、あまりつまらなそうにしていなかったのが意外だった。

発展：服装のあり様を言語のそれと関連づけた the language of clothes からの抜粋。

この書籍は「衣装の文化論」という邦題で一部がマクミランより教材として出版されたが、別な箇所を使用した。

第6課 9.11テロの際に、ブッシュ大統領に報復戦争に関する全権を与える決議に唯一反対票を投じた女性議員 Barbara Lee と、第一次・第二次大戦へのアメリカの参戦に反対した女性議員 Jeanette Rankin の話

この課は教育実習生が国際関係専攻であったため、実習生が担当した。この実習生は実際に Barbara Lee のスピーチ（音声）を用意したり、スピーチの全文、およびブッシュ大統領（当時）のスピーチを教材化するなど、大変意欲的に取り組んでくれた。

惜しまれるのは9.11事件は、大人には昨日のこのように感じられても、今の高校2年生はまだ小学校2年生だったので、どうも現実感がないようであった。

2学期

第7課 イースター島の島民が森を切り過ぎて自らの居住環境を破壊してしまった話

イースター島は環境破壊の典型事例として取り上

げられることが多い。森を切ったのはモアイ像を運搬するためという説が広く支持されているが、イースター島を訪ね、モアイ像に触れた人の中には、そうではないという主張をする人もいる。

発展：①イースター島の基本情報、地勢、気候、歴史、民俗など ②地球全体が一つの生命体であるとするガイア理論

環境問題は昨年度もたびたび取り上げたため、後者はあまり新鮮味がなかったようで、生徒は興味を示さなかった。

第3課 児童労働の実情を伝え、子供たちを解放しようとして立ち上がった少年の話

発展：ILO の下部組織である IPEC (International Program on the Elimination of Child Labor 児童労働撤廃国際計画) による児童労働に関する定義

第5課 男女の得手不得手の性差傾向は、脳の構造に由来するものか。

しかし、結局は努力や社会環境に負うところが大きいと結んでいる。教科書に載せるにはこういう結論にしないとだめなのではないか、と生徒が言っていた。

発展：①脳の基本構造に関する情報 ②言語の男女差と脳の発達時期の差の関係

第8課 クロウンの将来性

教科書は高揚感のある文章だが、すでに生命科学の関心は ES 細胞や iPS 細胞にあり、クローンは歴史になった感がある。

発展：①体細胞からクローンを作る方法、受精卵からクローンを作る方法 ②遺伝子組み換えの危険性 ③ヒト遺伝子組み換えの倫理

3.6.4 SSH 関連のアクティビティ

例えば第8課は生命科学に関する課であったので、少し発展的な内容をハンドアウトで扱った後、使用した教材を参照しながら和文英訳をする活動を行った。この活動を相互コミュニケーションに発展させるまでには至っていないが、生命科学の一分野に関する表現力を養うためと、この課の文法事項である仮定法の演習と位置付けた。以下に問題の一部と生徒の解答例を挙げる。なお、生徒の解答はそのままを掲載し、誤りなどは修正していない。

●クローン羊のドリーが誕生したことは世界に衝撃を与えた。重要なことは次のとおりである。一つは哺乳類のクローンは初めて成功したこと、もう一つは雄が

関与せずに新たな個体が誕生したこと、さらに、核を除去した卵子と分化した細胞を融合させることで、その細胞が初期化されることであった。

The fact that Dolly, the cloned sheep, had been born shocked the world. Things important are as follows. One thing is that it was the first to succeed in cloning a mammal, and another is that a new individual was born without a male having anything to do with it. Plus, by fusing an egg whose nucleus had been removed with a programmed cell, the cell was reprogrammed. (Y.W.)

●日本では 1998 年に牛のクローンを作ることに成功したが、これは一つの初期胚をばらばらにして、同じ遺伝子を持つ複数の個体を発生させる方法によってであった。

In Japan, we have succeeded in cloning cows in 1998, by dividing an embryo in the early stage and developing several individuals which have the same gene. (U.S.)

●クローンによる動物の複製については、倫理的な観点から議論することが重要である。なぜなら、別の個体から取り出した卵子と代理母が必要になるからである。

It is important to examine cloning of animals from an ethical point of view, because it requires a surrogate mother and an egg taken out of another individual. (K.T.)

●もし、iPS 細胞が作られていなかったら、クローンによる哺乳類の複製についてもっと多くの議論がなされただろう。

If an iPS cell weren't created, there would have been more discussion about cloning mammals. (I.J.)

If the iPS cell hadn't been found, there would be more discussion about cloning mammals. (N.Y.)

If an induced pluripotent stem cell hadn't been produced, we would have more discussed cloning animals. (K.U.)

やはり仮定法過去完了はまだ十分には定着していないようである。

3.6.5 副読本指導

3.6.5.1 使用した教材

春休み *Ghost in the Guitar* (Penguin Readers Level 3)

1 学期 *Lorna Doone* (Oxford Bookworms

Stage 4)

夏休み *Polite Fictions in Collision* (金星堂)

2 学期前 *Macbeth* (Penguin Readers Level 4)

筆者は読書は書き手と読み手の間に成立するコミュニケーションの一形態だと捉えている。それは双方向のものではないが、書き手が発信した内容を文字を介して読み手が受信するダイナミズムが機能しているということは間違いない。

なお、副読本の事後指導はすべて独立したテストとしている。また、テストの中に内容に関して内容理解や意見を問うような設問をすることにより、作者、読者(生徒)、出題者の三者間で二次的なコミュニケーションが行われるという効用もある。

3.6.5.2 問題と生徒の解答例

夏休み明けに行った *Polite Fictions in Collision* の例を示すこととする。この箇所について、1 学期に学習した上記第 6 課と関連付けて、次のような問題を出題した。

● 次の英文について下の間に答えなさい。

A Japanese college student who stayed in America for a few months was amazed to discover that Americans weren't interested in how good or bad his English was, so long as he could make his meaning clear.

This presented a real problem for him, because he was accustomed to politely deferring to the opinions of others, either by agreeing with everything they said, or by remaining silent. The Japanese polite fiction that "you and I are members of a group" involves the corollary polite fiction that "you and I think and feel alike."

問 アメリカの polite fictions が下線部と対照的なものであるとしたら、Jeanette Rankin や Barbara Lee はなぜあのような状況に追い込まれたか。Polite Fictions in Collision の内容を踏まえて、各自の考えを日本語で述べなさい。

(生徒の答案)

①polite fiction はそれぞれの国の人々の行動の根底にあるものではあるが、全ての状況においてそれが絶対的であるわけではなく、あくまで傾向を決めるものであるため、米国でも集団で同じ考えをしようとすることはあり得る。(N.T)

②日本では個人と国家を厳格に区別して論じ分ける習慣はないが、アメリカ合衆国では、国家は個人々の力によって獲得したものであり、国家の重要な決定に関しては国家という集団の中の個人という位置づけがなされ、国家が優先されるから。(U.H.)

もちろん全ての答案がこのようであるわけではないが、これらは作者、読者(生徒)、出題者の三者間で二次的なコミュニケーションが行われていることを示す例といえよう。

3.7 高校2年ゼミナール「コーパス言語学ゼミ」

(59期) 担当：秋元佐恵

3.7.1 はじめに

本校では高校2年次に、年間7回のゼミナールを開講している。生徒は自分の選択した講座を受講し、研究テーマを選び、その成果を高校3年時にテーマ研究(卒論)として提出することが義務づけられている。

昨年度、英語科では「コーパス言語学ゼミ」を開講し、現在20名の生徒がコーパスをテーマにした卒業論文を作成中である。なお、これらの生徒の中から2名が昨年度台湾国立台中第一高級中学校との生徒研究交流に参加し、コーパス言語学にかかわる個人研究発表を行って成果をあげた。

3.7.2 コーパスとは

コーパスは、言語を科学的に分析する新たな試みである。すなわち、本来質的に分析・考察すべき言語という対象を、頻度(あるテキストの中でその語が何度登場するか)およびコロケーション(その単語は主にもどどのような語とともに使われるか)を量的に測ることにより、単語や文法の本質に迫ろうとするものである。その成果は今や多くの辞書や文法書、教材に反映されており、最近では大学や大学院の講義でコーパスが紹介されることも多い。

現在、中高の英作文の授業で教師がコーパスの用例を紹介する例は報告されているが、生徒自身がコーパスを用いて「研究する」という例は、筆者の知る限りはない。しかし本校のゼミナールのように、生徒自らテーマを設定し、最終的に卒業研究をまとめる形式の授業には、ふさわしい題材と思われた。

3.7.3 2009年度ゼミナールの内容

年間7回の講座を以下のようなメニューで行った。

第1回(6月13日)

コーパスの定義・BNCトライアル

第2回(6月27日)

BNCミニ研究発表・AntConcワークショップ

第3回(9月12日)

日英対照言語学・JEFLLコーパス紹介

第4回(10月17日)

投野由紀夫 東京外国語大学准教授による講義

第5回(11月14日)

Project Gutenberg・Mark Davies BNC紹介

第6回(1月9日)

研究計画発表会(1)

第7回(1月23日)

研究計画発表会(2)

通常のゼミの進め方は以下のとおりである。

- ① コーパスやコンコーダンスの紹介。
- ② 課題(タスク)を1~2問出し、紹介されたコーパスを用いて各自パソコンで検索。
- ③ 結果の提示、考察。
- ④ 2人1組でリサーチクエスチョンを設定して調べ、結果を考察したものをパワーポイントで発表。

3.7.4 今年度の卒業研究について

論文を書く際には、科学的論文の体裁をとるよう指導した。すなわち、問題の所在、研究の背景、方法、結果、考察、示唆、限界、参考文献までが、一貫性を持って書かれていること。また、コーパスは結果が数値で表れるものではあるが、なぜそのような結果が生まれたか、言語学的分析を加えること。さらに、示唆の部分では、英語教育や英語学習に関する提言をすること、などである。

これまでに提出されている卒業研究タイトルには以下のようなものがあがっている。

- ・ シェイクスピア作品における単語使用比較
- ・ 大統領演説の比較
- ・ オバマ大統領の演説内容の分析
- ・ 解体デカルト『方法序説』
- ・ コーパスを用いた類似構文の研究
- ・ 助動詞の使用状況について
- ・ 文体と文法
- ・ 英語の文語と口語
- ・ 英語のことわざについて
- ・ 新聞記事は英語学習に有効か

- ・ 英語辞書の比較
- ・ 歌詞における英語の傾向

コーパスを用いた英語教育については、今後も研究を進めるつもりである。ゼミナールだけでなく、通常の英語授業に活かす可能性についても模索したい。

3.8 高校3年生：リーディング (59期)

担当：八宮幸夫

3.8.1 はじめに (発展期の完成)

「国際社会で発信する英語力の育成」ということであるが、あまり身近に「国際社会」はないと思っていたところ、昨年 SSH の関係で生徒を台湾に引率する機会を得た。そしてそこで英語による研究発表をし、現地の生徒と交流する本校の生徒の姿を目の当たりにしたとき、実はこんなに身近であったのだということを実感した。同時に、そこで生徒が行った活動は、中学時代から私が実践してきた発表活動と基本的には同じ延長線上にあるもので、自分の実践が決して間違っただけではないというささやかな自信も得た。

過去2年間は、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」を通じて、学習した教材に関する話題について学期末に口頭発表する課題を実施し、報告してきた(『筑波大学附属駒場論集』第48集、第49集)。

高3の「リーディング」の授業では、時間内にひとまとまりの英文を読むことを第1の目的としてきたが、読んだ文章の英文サマリーをしたり、その文章について意見をまとめたりということも時間の許す範囲で行ってきた。また、学期末には1、2年のとき同様、教材に関連した話題の口頭発表を行った。本稿では、その実践を中心に述べる。

3.8.2 「リーディング」の授業

高2までの授業では、oral introduction をし、その後本文を読ませてより深い理解をさせ、音読やその他の活動に進んでいた。「リーディング」では、自力で英文を理解することが目標であるから、oral introduction は最小限に抑え(固有名詞や難しい語の発音など)、様々な英文を読むことを中心に行った。週3時間あるので、3つのパターンを考えた。

3.8.2.1 400語から800語程度の英文を精読する

指示代名詞の指す内容や構文などに注意して文意を取る。過去の入試問題や雑誌のエッセイを使用。例えば、*Science* の Editorial や *The Economist* の Essay、

The New York Times Magazine の Essay など。

3.8.2.2 リスニングとして導入し、速読する

『大人のための英語教科書』を使用。大学生が4分程度で読める英文を12編収録してあるもので、内容的に高校上級生の知的好奇心を持たすものが多い。アメリカ英語・イギリス英語両方の発音で朗読してあるCD付きなので、リスニング教材として概要を取らせした後、速読教材として本文を配布する。

3.8.2.3 1000語以上の比較的分量の多い英文の概要をつかむ。

かつて東大の教養課程のテキストであった *The Universe of English*, *The Universe of English II*, *The Expanding Universe of English II* の英文や短編など、注釈を頼りに概要をつかみ内容を味わう。知的で内容的にも興味深いものが多く、CDも付いており、まとめとして音声面から復習することも出来る。

なお、基本的に予習は課さず、その場で配布した英文を20~30分で読ませ、残りの時間で理解を確認する、という形式である。3.8.2.3に属するものは50分フルに読ませ、次の時間に理解度を確認した場合もある。

3.8.3 発表活動としての実践例

3.8.3.1 読ませた英文のサマリーを書かせる

3.8.2.2 で紹介したリスニング教材中の“Doping in Sports”はスポーツにおけるドーピングの問題点とその具体的な事件を述べたものである。はじめに、CDを聞かせながら、適語の穴埋め問題によって、概要を取らせる。その後、内容を問う以下のような問題を出して考えさせる。授業中には、個々の解答を聞いていくわけだが、まとめとして英文サマリーを書かせた。その際、5つの設問がサマリーをまとめるヒントになるわけである。初めのうちは、このようなヒントがあるほうがまとめやすい。

Further comprehension

- 1) What is the use of drugs to improve performance considered to be?
- 2) Why did USADA get to know about the use of a secret drug?
- 3) Why was THG not detected by existing tests?
- 4) Who made a test to detect it?
- 5) What lesson can be learned from the scandal?
Give opinions from two different points of

view.

生徒の作品例をあげる：

Doping Sport(s)

Millions of people around the world love sport(s). Sports can appeal to us at many levels, and the use of drug is the worst kind of betrayal. But the pressure to succeed is irresistible and athletes sometimes use drugs to improve their abilities.

In June 2003, USADA received a phone call saying that many athletes were using a secret drug. This drug was very powerful and, to make matters worse, it was created to escape detection by existing tests. After months, when the chemists at the University of California understood its chemical makeup and started making a test to detect it, the fact turned out to be true that twenty of the most famous athletes were using this drug, THG.

What lesson can be learned from the scandal? Optimists may see that this scandal is a good opportunity to clean up sports while pessimists will point out that THG would never have been discovered without the tip-off and that there are still another ‘THG’s

3.8.3.2 読ませた英文の感想・意見を書かせる

これもリスニング教材の“Can a Good Doctor Be Honest?”と題する英文で、特に効果のない薬でも、医者「効果がある」といって患者に薦めると実際に患者に効果が見られるというプラシボ効果(Placebo effect)が話題となっており、医者は正直なほうが良いのか、ウソも方便の場合もあるのか、ということが論じられている。この英文を読んだあとに、賛否の意見を書かせた。

その例をあげる：

(In favor of doctors' dishonest act)

Doctors should be confident in their medical treatment and don't have to be honest. In Oriental medicine, doctors don't always know why their treatment is effective. Their only concern is the results of the treatment, not in the reasons. No methods are better than those which make their patients better.

(Against doctors' dishonest act)

I don't think that doctors should be more confident than they really are. Of course, if they aren't

confident, patients are likely to be uneasy, but I think they should do their best instead being less confident. In other words, however difficult it is to make the best treatment [help?], they must do so. (Sensible point of view)

When patients are not so seriously ill [in a minor illness?], doctors might be able to use placebo. But when they are seriously ill, the doctors should be honest, because, while a minor illness isn't fatal, a serious [heavy?] illness may deprive patients of their life.

決して分量的に多いコメントではないが、読んだ内容に対してサマリーを書いたり意見を述べたりするのは、その英文に対して能動的な行為を起こしていることになり、「リーディング」の授業でも積極的に取り入れるべきであろう。

3.8.3.3 学期末の発表活動（パフォーマンス・テスト）

1 学期に扱った教材について、あるいはそれに関連した内容について1分間、英語でスピーチするという活動である。大部分の生徒が3.8.2.3で述べた1000語以上のやや長めの論文、短篇小说を選んだ。以下にその概要を示し、生徒の発表例をそのあとに挙げる。

1) “The Nightly Battle: Bacteria vs. Egg”：

The Universe of English 中の一編。多彩な科学者 David Bodanis の *The Secret House* の一節。冷蔵庫の卵がバクテリアからどのようにして身を守っているかを、マイクロスコピックな描写で語る。内容は科学的だが、ユーモラスな表現で飽きさせない。

2) “O'Malley and Schwartz”：

The Universe of English II 中の一編。Patrick McGrath という米国作家の作品で、ギリシャ神話の「オルフェウスとエウリディケ」を下敷きに舞台を現代のニューヨークに移したゴシック短篇小说。

3) *My Life between Japan and America*：

日米大使であった Edwin O. Reischauer の自伝。ケネディ大統領がライシャワーに日米大使になるよう依頼し多量、それを受けるかどうか悩んだ末に承諾する場面の抜粋。

生徒の発表例：

① I would like to talk about “The Nightly Battle: Bacteria vs. Egg.” I was interested in this text.

I have two reasons.

First, I'm interested in biology. I haven't considered a role of the white of an egg is the immune system of it. So, I was surprised at the fact that the white is able to kill invaders.

Secondly, the way the author writes is very interesting. He came up with various ideas to write this text for the public. For example, the author used an ordinary food and personified bacteria for readers to easily understand.

② The story of "O'Malley and Schwartz" is a parody of a famous Greek Mythology. A famous musician Christoph Willibald Gluck composed an opera version of it, named "Orfeo ed Euridice." The most popular part of the opera is used even in the graduation ceremony of this school. When Orpheus O'Malley played the violin in the subway station in the story, it reminded me of the melody of the opera.

③ The story "O'Malley and Schwartz" seems to be strange and shocking when I read it for the first time. I understood this story is a kind of parody of one of the Greek Myths, "Orpheus and Eurydice," but even so, my "uncomfortable feeling" didn't disappear. All storyline doesn't seem like reality, for example, Eurydice Schwartz was killed by a crocodile at the Central Park Zoo in the story. That's impossible. It is a far-fetched story! Moreover, the ending seems horrible. I've understood it as just a groper's story and it was not interesting to me.

However, I realized that this "uncomfortable feeling" is the message of this story when I read a comment of this story on the Internet. It says this is the modern version of the Greek Myth and the "uncomfortable feeling" expresses how strange the Modern Age is. Original Myth depicts love, but it changes into the groper's story in modern version. Actually, this story is kind of irony and I found it interesting when I realized that.

④ Hello, class. I'm going to talk about Edwin O.

Reischauer. He was born in Tokyo in 1910. He had lived there until he was 17 years old, then he went to U.S. He was interested in East Asia studies, but there were very few people like him in America at that time. In World War II, he went to the front in the U.S. forces as lieutenant colonel.

After the "Security Treaty struggle in Japan," Japan and U.S. relations were turning worse. John F. Kennedy, the then president, had his eyes on the article "Broken Dialogue." Then, he requested Reischauer to become ambassador to Japan. Matsushita Haru, his wife, strongly objected to his assumption[acceptance?]. But he decided to carry out a serious mission to restore Japan and American relations.

3.8.4 おわりに

「リーディング」の授業は、基本的には文章の読解力をつけるのが目的であるが、その文章を読みっぱなしではなく、それについて意見や感想を書いたり、要約したりすることで、その文章を自分の血肉とすることが出来る。文章を読むこと自体、単純に受身的な行為であるというわけではないが（読む行為は相当な集中力を必要とする、ある意味能動的な活動である）、その上さらに文章を書くことで、もやもやとした考えがもつとはっきりした形を取ることになる。

また、上で見たように、書くだけでなく発表活動を行うことで他人の意見を共有することも出来る。筆者の場合、リーディングの授業でリスニングも取り入れているので、結局は書くこと、発表することを加えれば、ライティング、スピーキングをも行うことになり、言語教育の基本である4技能を伸ばすという目標にも合致する。ただし、読んだあとに何かを書かせる場合、その読み物自体が何かしら反応したくなる魅力・メッセージを持っていないければならない。

・高3の「リーディング」というと、どうしても受験対策に終始しがちであるが、英語力をつけるにはメッセージ性のあるよい英文を見つけ、読ませることが、遠回りのようであるが一番効果的なのではないかと思われる。「発信する力」も同様である、と信ずる。

3.9 高校3年生：ライティング (59期)

担当：多尾奈央子 山田忠弘

3.9.1 ライティング授業の概要

2単位のうち、1単位時間を基礎的な文法の確認と和文英訳、もう1単位時間をパラグラフライティングの指導にあてている。採択教科書は主に生徒の自宅学習用にあて、授業はすべて教員作成のハンドアウトを使って進められる。

和文英訳の時間では過去の大学入試問題を適宜使用しつつ文法的なポイントを復習し、さらに発展的素材として新聞記事の英訳を行う。その他、英語の歌を使ったリスニング活動も行われている。

パラグラフライティングの時間では、パラグラフの基本的構造を理解させたうえで、様々なトピックを与え実際に文章を書かせている。分量としては最低150語を目安として提示しているが、多くの生徒は200語前後でまとめてくることが多い。

3.9.2 パラグラフライティングでのトピック

今年度は以下のようなトピックを扱っている。

- (1) What are some important qualities of a good friend? Use specific details and examples to explain why these qualities are important.
- (2) Do you agree or disagree with the following statement? People should sometimes do things that they do not enjoy doing. Use specific reasons and examples to support your answer.
- (3) It has been said, "Not all learning takes place in the classroom." Compare and contrast knowledge gained from personal experience with knowledge gained from classroom instruction. In your opinion, which source is more important? Why?
- (4) People have different ways of escaping the stress of modern life. Some read, some exercise, others work in their gardens. What do you think are the best ways of reducing stress? Use specific details and examples in your answer.
- (5) Some people believe that success in life comes from taking risks or chances. Others believe that success results from careful planning. Compare these two views. Which position do you agree with? Be sure to use specific reasons and examples to support your choice.
- (6) In the future, students may have the choice of

studying at home by using technology such as computers or television or of studying at traditional schools. Which would you prefer? Use reasons and specific details to explain your choice.

- (7) The use of instant messaging, online social networks, e-mail and other forms of electronic communication has become increasingly common among people of all ages. How do these new technologies affect the way we socialize and build relationships? Explain your position with reasons and examples from your own experiences, observations or reading.
- (8) Which would you choose—a high-paying job with long hours that would give you little time with family and friends **or** a lower-paying job with shorter hours that would give you more time with family and friends? Explain your choice, using specific reasons and details.
- (9) If you could invent something new, what product would you develop? Use specific details to explain why this invention is needed.

4 今後の課題

以上概観したように、本校では6年間を通じて「コミュニケーション能力の育成」という1本の軸を意識しつつ、生徒の発達段階に応じて「基礎期」「実践期」「発展期」とスキルをより向上させ、伝達しあう内容も深まっていくような授業を目指している。

高校生になると進学を意識して通塾率が高まり、ともするとさしあたって知識だけの英語で充分、とするような風潮がままある。しかし、「知っている」と「使える」ことの間には大きなギャップが存在する。生徒には、このことをしっかり理解させなければならない。また、言うまでもないことだが、真に「使える」ようになるためには、単に学校で提供される授業に受動的に参加しているだけでの目標達成は不可能である。生徒自身がより自立した学習者となり、自ら工夫を重ねながら自律して日々の学習に取り組むことができるようになることが肝要である。

以上をふまえ、生徒の意識をいかに高めるか、魅

力的な教材やリアルなコミュニケーションを体験する場をどれだけ提供できるか、などが今後の課題である。

【参考文献】

- Drayton, C. and Gibbon, M. (2007) *Let's Talk about It -1,000 Questions for Conversation-*: Pearson Longman
- Lubetsky, Michael., et al. (2000) *DISCOVER DEBATE*: Language Solutions Inc.
- Molinsky, Steven J. (2002) *SIDE by SIDE Book 3 (3rd edition)*: Pearson Longman
- (2003) *SIDE by SIDE Book 4 (3rd edition)*, Pearson Longman
- Reischauer, Edwin O. (1986) *My Life between Japan and America*: Weatherhill
- 東京大学教養学部英語教室編 (1993) *The Universe of English* 東京大学出版会
- 東京大学教養学部英語部会編 (1998) *The Universe of English II* 同上
- 東京大学教養学部英語部会編 (2000) *The Expanding Universe of English II* 同上
- 八宮孝夫他(2009)「国際社会で発信する能力の育成(2)」『筑波大学附駒場論集』第48集
- 平原麻子他(2010)「国際社会で発信する能力の育成(3)」『筑波大学附属駒場論集』第49集
- 山本史郎、ブレンダン・ウィルソン(2008)『大人のための英語教科書』IBCパブリッシング